

ているブレイルセンス等の点字情報端末にて、全体投影のパソコン要約筆記の文字情報を取得したいという声が高まっている。具体的には、IPtalk や最近利用が増加している UD トークのブレイルセンス向けアプリの開発が、全国盲ろう者協会やメーカーに対して要望されている。これを受けて、全国盲ろう者協会を中心に関係企業・団体が連携しながら、こうした要望に応えるべく、検討が進められているが、2016年4月現在具体的な製品化には至っていない。

5.6 今後の盲ろう者向け文字情報支援に向けて

本研究では、盲ろう者の聴覚障害者向けパソコン要約筆記の活用可能性について、盲ろう当事者へのアンケート調査や要約筆記者向けのカリキュラム案の作成等、盲ろう者団体と要約筆記団体とが共同で取り組んできた。8回に上る「研究作業委員会」と、その親委員会である4回の「研究委員会」が開かれ、それぞれの立場から非常に活発な議論がなされた。こうした取り組みは初めてのことであり、大変貴重な場であったと思う。さまざまな議論がなされたが、互いの立場の違いが明確になった議論として、パソコン要約筆記のログをめぐる議論が思い出される。この話題を手がかりに、盲ろう者の今後の文字情報支援を考えてみたい。

盲ろう者の文字情報支援においては、ブリストタ通訳においても、またパソコン要約筆記においても、そのログの取り扱いが盲ろう者個人に委ねられるのが通例である。盲ろう者は、その場だけでは情報に追いつくことができない人も多く、また自分でメモをとることもなかなか難しいため、ログを後から読み直して欠如した情報を補うことも多い。そのため、ログは非常に貴重な情報源となる。ただし、ログの取り扱いに関する明確なルールは存在しない。

一方、パソコン要約筆記においては、ログの

提供は基本的になされない。あくまでも、パソコン要約筆記はその場の音声情報を通訳するものであり、記録を目的としたものではないという考え方である。記録が必要な場合は、別途記録者の依頼を受け付けている団体もある。

こうした違いが明確になったことは、ある意味非常に重要なことであると思う。特に盲ろう者団体としては、ログの取り扱いについてこれまであまり考えてこなかった節がある。しかし、要約筆記の考え方に触れることで、盲ろう者にとってのログの重要性を改めて認識できたのではなかろうか。同時に、今後全体投影される聴覚障害者向けパソコン要約筆記を、盲ろう者が個人のパソコンにつないで利用するといった場合、盲ろう者向けのパソコン要約筆記とは異なるルールで運用されているサービスであるということ、盲ろう者自身がもっとしっかり認識して利用することも重要であろう。

要約筆記者においては、音声情報の通訳のみならず、視覚的な状況やその場の状況、移動介助等、個々の盲ろう者に対するニーズを踏まえた支援の重要性をさらに深く理解する必要があるだろう。特に、盲ろうの支援は「パーソナル・アシスタンス」とも言われており、基本的にパソコン要約筆記においても個別支援が中心である。例えば、会議中の通訳はもちろんのこと、休憩中等でも、決して通訳者は休憩ではなく、盲ろう者個人の必要とする情報等にアンテナを張り巡らせておかなければならない。そうした知識やノウハウが蓄積されていくことで、盲ろう者が聴覚障害者向けの要約筆記を利用しやすくなると同時に、要約筆記出身の盲ろう者向け通訳・介助者も増加してくるのではないかと考える。

盲ろう者のパソコン要約筆記のニーズは非常に高い。また盲ろう者向けのパソコン要約筆記者の数も限られており、各地の盲ろう者団体の中には独自に盲ろう者向けパソコン要約筆記者

の育成を行っているところもある。本研究は単年度の研究であり、盲ろう当事者が参加する中で、なかなかじっくりと時間をかけて議論を深めることができなかつたことが心残りである。しかし、こうした方向性は決して間違っていない

いことだと思う。双方の考え方に相違もあり、結論が出なかつた事柄もあったが、引き続き盲ろう者の文字情報支援の充実を図るため、互いに協力関係を継続していただければ幸いである。

6 参考資料 1 各視覚障害関連機器・ソフトウェア

項目	名称	開発・販売元	URL	コメント	
1	PC-Talker	高知システム開発	http://www.aok-net.com/screenreader/	PC-Talker は、Windowsの操作を音声で案内するスクリーンリーダー(ScreenReader)です。PC-Talkerをインストールするだけで、お使いのパソコンが「おしゃべりパソコン」に変身します。パソコン操作支援ソフトとして幅広くご利用ください。	
		スカイフィッシュ	http://www.skyfish.co.jp/focustalk/index.html		
	FocusTalk			日本語スクリーンリーダー(画面読み上げソフト)。パソコンの画面情報やアプリケーションの内容、キーボードから入力した情報をコンピューターの合成音声で読み上げます。視覚障害者の方をはじめ、高齢者やお子様、外国籍の方などあらゆる方にご利用いただける製品です。FocusTalkのショートカットキーは95Readerのショートカットキーと互換性があります。	
	Catwalk	Kazusoft	http://www.kazusoft.com/catwalk.php	視覚障害者のためのスクリーンリーダーです。	
	JAWS for Windows	Extra/Freedom Scientific	http://www.extra.co.jp/jaws/	JAWS for Windowsは、画面やウィンドウに表示された情報や入力した文字を読みあげるスクリーンリーダーです。Internet ExplorerやMicrosoft Officeなどの各種主要ソフトウェアに対応しているほか、強力なスクリーピング機能により、多くのアプリケーションの読み上げを実現しています。JAWS for Windowsを使うことにより、Webページの読み上げ、文書の読み上げおよび作成のほか、さまざまな情報へのアクセスが可能になります。世界のスタンダード、世界の高機能スクリーンリーダーとしての卓越した性能に加え、Version 16.0 日本語版では、Windows 8のタッチスクリーンへの対応を強化し、JAWSコマンド検索のほか、さまざまな新機能を追加し、既存の機能を強化しました。	
2	NVDA	NVDAプロジェクト	https://osdn.jp/projects/nvdajp/		
				Non Visual Desktop Access (NVDA) は Windows を音声読み上げと点字出力で操作するためのソフトウェア(スクリーンリーダー)です。NVDA 日本語版は NV Access がリリースする NVDA に日本の利用者のための機能を追加したものです。	
	ブレイルセンスU2	Extra	http://www.extra.co.jp/sense/bsu2.html#gaiyo	ブレイルセンスプラスがパワーアップ。ブレイルセンスU2は、仕事にも勉強にも、そして生活にも、いつでもどこでも点字と音声で快適なモバイル環境を実現する最強、最速の音声・点字PDA(携帯情報端末)です。	
	ブレイルセンスオンハンドU2ミニ	Extra	http://www.extra.co.jp/sense/bsu_u2mini.html#gaiyo	ブレイルセンスオンハンドU2ミニは、18セルの点字ディスプレイがついた世界最小、最軽量の音声点字PDAです。どこへでも気軽に持ち運べて、快適なモバイル環境を実現します。ウェブアクセス、電子メールの送受信、DAISY図書や音楽の再生などの、さまざまな機能に加え、GPSレシーバーと電子コンパスを内蔵。より行動的な日常生活を支援します。	
	ブレイルメモスマート16	KGS	http://www.kgs-jpn.co.jp/index.php?E8%A3%BD%E5%93%81%E8%A9%B3%E7%B4%B0	点字ディスプレイの新たな形「ブレイルメモスマート」。これまでの「ブレイルメモシリーズ」の機能をそのままに大幅パワーアップ	
	ブレイルメモスマート40	KGS	http://www.kgs-jpn.co.jp/index.php?E8%A3%BD%E5%93%81%E8%A9%B3%E7%B4%B0	ブレイルメモスマート40は、仕事に勉強にそして生活にと、いつでもどこでも点字と音声を利用した快適なモバイル環境を実現するコンパクトでクールな次世代型点字ディスプレイです。	
	清華	日本テレソフト	http://www.nippontelesoft.com/menu/disp_001.html	日本テレソフトは、点字ディスプレイ「清華」(製造は中国)の第3弾として、より小型軽量化された新型清華を発売いたします。新たに開発した小型のマイクロ点字セルを使用したことにより、重量は600gと軽く、長さ33cm、幅9cm、高さ2cmと、40セルの点字ディスプレイとしては世界でも有数の小型軽量となっています。また、操作ボタンも各種のスクリーンリーダーソフトに対応して使いやすく設計されています。価格は178,000円(非課税)と、40セルの点字ディスプレイとしては低価格でお買い求めやすくなっています。	
	Focus 40 Blue	Extra	http://www.extra.co.jp/focus_40_blue.html	40セルの軽量でスリムな持ち運びに便利な点字ディスプレイ。紙のように滑らかで読みやすい点字セル、素早く反応するキーボード、Bluetoothに対応	
	3	MyMailIII	高知システム開発	http://www.aok-net.com/products/mymail.htm	MyMailIIIは、スクリーンリーダー PC-Talkerシリーズに対応した、音声メーラー(音声メール)ソフトです。SSL対応など上級者向けの機能を充実させながら、初心者にはさらにやさしく使いやすくなりました。
			オンラインソフト工房	http://www.geocities.jp/katsuragi_nori/VoicePopper/	
Voice Popper		日本リハビリテーション協会	http://www.normanet.ne.jp/~altair/	パリアフリー型メールソフト(視覚障害者および肢体不自由者向け)です。ニュース受信機能、RSSリーダー機能、Webブラウザ機能など豊富な機能を含みます。	
ALTAIR for Windows				ALTAIRは視覚障害者・ロービジョン(弱視)・盲ろう者の就労、学習、生活の場でのIT利用を向上させる支援ソフトウェアです。エディタを中心とする、Webブラウザ、メーラーを統合したシームレスな作業環境を提供します。合成音声での読上げ、点字ディスプレイ出力、拡大文字表示が可能です。視覚情報に頼ることなく、マウスを全く使用せずにキーボードの操作だけで文章の作成、インターネットによる情報交換、情報収集が可能となります。	
やむメール	パソコン教室やむ	http://pcyam.com/yammail/index.htm	障害を持たれた方や、高齢者の方など、様々な状況の方に合わせた、どなたにでも使いやすいメールソフトです。		

項目	名称	開発・販売元	URL	コメント
4	MyNews II	高知システム開発	http://www.aok-net.com/products/mynews.htm	
		MyNewsは、スクリーンリーダー PC-Talkerシリーズに対応した、ウェブニュースを簡単な操作で読みあげるソフトです。		
	VoicePopper	オンラインソフト工房	http://homepage2.nifty.com/oss/	
		バリアフリー型多機能メールソフトです。視覚障害者向けのスクリーンリーダー対応をおこなっています。メールソフトとしての機能も豊富ですが、それ以外にも簡易Webブラウザ機能、ニュース受信機能、RSSリーダー機能など豊富な機能を含んでいます。		
		GawachanSoft	http://www.gawachan.com/gnews/	
GSニュース	GSニュースとは、新聞社などがインターネット上に掲載しているニュースを受信して閲覧するためのソフトウェアです。GSニュースを使用すれば複数の新聞社のニュースをまとめて読むことができますので、通常のインターネットブラウザでニュースを読むより効率的な情報収集ができます。			
	MMニュース	http://www.am-corp2.com/mm-news/		
5	サーチエイド	オンラインソフト工房	http://homepage2.nifty.com/oss/	
		ネット検索補助ツールです。辞書や翻訳、電話番号検索、鉄道路線探索、ネットショップの商品検索など、インターネット上で提供されている多種多様な検索サービスを、障害をお持ちのかたでも楽に利用できるようにするバリアフリー型ソフトです。各検索サービスに対応した機能はモジュール(テキストのみで記述したファイル)として提供されます。		
	MMホームページ検索	MiyaMiya	http://www.am-corp2.com/mm-hpsh/	
		本ソフトは、インターネット上の特定の役に立つホームページの検索操作をMMホームページ検索ソフトの画面上で行うことで、ホームページ上を自動検索して検索結果をメール形式で読み込みます。		
		高知システム開発	http://www.aok-net.com/products/mybook.html	
6	MyBook III	「MyBook III(マイブック スリー)」は、デジタル化された書籍を簡単操作で楽しめるスクリーンリーダー PC-Talkerシリーズ対応のバリアフリー読書システムの決定版です。		
		BookTerm	KGS	http://www.kgs-jpn.co.jp/index.php?%3AVipDL_sof
7	ZoomText	アメディア	http://www.amedia.co.jp/product/zoomtext/	
		ZoomTextは、世界中で弱視の方々に愛用されているWindowsの表示画面を拡大し、見やすくするためのソフトウェアです。		
	iZoom	ラビット	http://izoom.rabbit-tokyo.co.jp/	
		・iZoomは「見やすく拡大表示」プラス「簡易音声読み上げ」機能付き ・利用スタイルに合わせ「CDバージョン」と「USBバージョン」をご用意 ・USBバージョンはインストール不要、持ち運びOK！ 複数台のPCをご利用の方にお勧め！		
		Microsoft	http://windows.microsoft.com/ja-jp/windows-8/use-magnifier-see-items	
拡大鏡	拡大鏡は、画面の一部または全体を拡大して、文字や画像を見やすくすることができる便利なツールです。いくつかの異なる設定が用意されているので、最適な方法で使うことができます。			
8	でかポインタ	小林 真	http://www.cs.k.tsukuba-tech.ac.jp/labo/koba/software/dpointer.php	
		とにかく大きなマウスポインタ		
	あんだーまうす君	小林 真	http://www.cs.k.tsukuba-tech.ac.jp/labo/koba/software/umous.php	
		視野狭窄を伴う弱視の方のために、マウスポインタを見つけやすくすると同時に字を読みやすくするツールを作ってみました。また、文字を読む時にアンダーラインのように使えます。(中略)主に対象としているユーザは、ZoomTextなどの画面拡大装置は使わずにWindowsが使えるけれど、視野が狭いのでよくマウスポインタを見失って困る、とか、テキスト文書や表を読む時どの行を読んでいたのかわからなくなる、といった状態の方です。		
	老眼マウス	ゆきやま	http://www.vector.co.jp/soft/winnt/util/se366675.html	
マウスポインタの周りをリアルタイムに拡大して画面を見やすくする虫眼鏡やレンズのようなマウスツールです。ポインタ位置がそのまま大きく見えるので視線移動がなく自然に使え、拡大レンズ部もとてもなめらかに動きます。 * Webサイトの文字が小さくて読むのに苦労する…。 * 臨機応変に図や文章を拡大してプレゼンテーションに差をつけたい！ * CAD、DTP、画像ソフトでドット単位の動きを楽にしたい！ * ノートパソコンの小さい画面を見やすくしたい…。 * 本物のレンズをモニターに近づけてドットを数えたことがある…。 そんな方にぴったりのソフトです。				

参考資料 2

盲ろう者に関する実態調査（厚生労働省平成 24 年度 障害者総合福祉推進事業）

第 2 部 第 2 章

年齢階級別と使用文字

表 2-2-43a 年齢階級別と使用文字

	回 答 者 総 数	文 字 ・ 活 字	点 字	そ の 他	特 に な い
回答者総数	2549	1394 54.7%	237 9.3%	245 9.6%	800 31.4%
10歳未満	24	9 37.5%	2 8.3%	0 0.0%	14 58.3%
10歳代	29	10 34.5%	3 10.3%	1 3.4%	15 51.7%
20歳代	50	20 40.0%	4 8.0%	5 10.0%	22 44.0%
30歳代	74	47 63.5%	15 20.3%	2 2.7%	18 24.3%
40歳代	116	74 63.8%	21 18.1%	13 11.2%	24 20.7%
50歳代	215	136 63.3%	35 16.3%	25 11.6%	41 19.1%
60歳代	401	212 52.9%	53 13.2%	51 12.7%	113 28.2%
70歳代	670	360 53.7%	65 9.7%	71 10.6%	203 30.3%
80歳代	715	409 57.2%	34 4.8%	59 8.3%	230 32.2%
90歳以上	255	117 45.9%	5 2.0%	18 7.1%	120 47.1%

視聴覚障害等級組み合わせ（等級）と使用文字

表 2-2-43b 視聴覚障害等級組み合わせ（等級）と使用文字

	回答者総数	文字・活字	点字	その他	特にない
回答者総数	2202	1233 56.0%	210 9.5%	197 8.9%	676 30.7%
視覚1・2級 聴覚1・2級	786	377 48.0%	100 12.7%	71 9.0%	279 35.5%
視覚1・2級 聴覚3～6級	713	337 47.3%	99 13.9%	93 13.0%	233 32.7%
視覚3～6級 聴覚1・2級	134	98 73.1%	7 5.2%	7 5.2%	30 22.4%
視覚3～6級 聴覚3～6級	569	421 74.0%	4 0.7%	26 4.6%	134 23.6%

視聴覚障害等級組み合わせ（状態）と使用文字

表 2-2-43c 視聴覚障害等級組み合わせ（状態）と使用文字

	回答者総数	文字・活字	点字	その他	特にない
回答者総数	2336	1257 53.8%	227 9.7%	230 9.8%	740 31.7%
全盲ろう	291	42 14.4%	60 20.6%	29 10.0%	168 57.7%
全盲難聴	579	96 16.6%	111 19.2%	100 17.3%	297 51.3%
弱視ろう	319	253 79.3%	16 5.0%	14 4.4%	59 18.5%
弱視難聴	1147	866 75.5%	40 3.5%	87 7.6%	216 18.8%

視聴覚障害経緯 5 分類と使用文字

表 2-2-43d 視聴覚障害経緯 5 分類と使用文字

	回答者総数	文字・活字	点字	その他	特にない
回答者総数	2315	1276 55.1%	226 9.8%	224 9.7%	709 30.6%
先天性	204	94 46.1%	24 11.8%	16 7.8%	83 40.7%
盲ベース	135	79 58.5%	39 28.9%	11 8.1%	25 18.5%
ろうベース	317	180 56.8%	40 12.6%	27 8.5%	89 28.1%
後天性（成人期）	1405	788 56.1%	123 8.8%	145 10.3%	413 29.4%
後天性（高齢期）	254	135 53.1%	0 0.0%	25 9.8%	99 39.0%

最も円滑な発信コミュニケーション方法と使用文字

表 2-2-43e 最も円滑な発信コミュニケーション方法と使用文字

	回答者総数	文字・活字	点字	その他	特にない
回答者総数	2439	1319 54.1%	222 9.1%	238 9.8%	776 31.8%
音声（発話）	1675	929 55.5%	158 9.4%	189 11.3%	481 28.7%
手話	186	115 61.8%	21 11.3%	19 10.2%	43 23.1%
指文字	23	7 30.4%	6 26.1%	1 4.3%	9 39.1%
文字	231	155 67.1%	21 9.1%	8 3.5%	58 25.1%
その他	88	23 26.1%	10 11.4%	11 12.5%	52 59.1%
特にない	236	90 38.1%	6 2.5%	10 4.2%	133 56.4%

最も円滑な受信コミュニケーション方法と使用文字

表 2-2-43f 最も円滑な受信コミュニケーション方法と使用文字

	回答者総数	文字・活字	点字	その他	特にない
回答者総数	2206	1240 56.2%	209 9.5%	221 10.0%	649 29.4%
音声（聴覚）	1515	839 55.4%	117 7.7%	178 11.7%	455 30.0%
手話を見る（弱視手話）	100	86 86.0%	3 3.0%	5 5.0%	12 12.0%
手話を触る（触手話）	88	33 37.5%	26 29.5%	11 12.5%	27 30.7%
指文字を見る	11	9 81.8%	2 18.2%	0 0.0%	1 9.1%
指文字を触る	11	1 9.1%	7 63.6%	1 9.1%	3 27.3%
手書き文字	121	32 26.4%	20 16.5%	11 9.1%	65 53.7%
筆記（筆談）	250	216 86.4%	7 2.8%	8 3.2%	30 12.0%
点字・指点字	25	2 8.0%	24 96.0%	0 0.0%	0 0.0%
その他	85	22 25.9%	3 3.5%	7 8.2%	56 65.9%

手段別情報入手頻度

どの手段においても「まったく情報を得ない」が最も多い

年齢階級と手段別情報入手頻度

表 2-2-46a 年齢階級と手段別情報入手頻度

	総数	一般図書・新聞雑誌				録音図書・点字図書				インターネット				ファックス			
		よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答
総数	2744	455	436	1816	37	97	118	2510	19	172	105	2447	20	57	144	2525	18
	100.0%	16.6%	15.9%	66.2%	1.3%	3.5%	4.3%	91.5%	0.7%	6.3%	3.8%	89.2%	0.7%	2.1%	5.2%	92.0%	0.7%
10歳未満	24	2	5	17	0	1	1	22	0	2	2	20	0	1	2	21	0
	100.0%	8.3%	20.8%	70.8%	0.0%	4.2%	4.2%	91.7%	0.0%	8.3%	8.3%	83.3%	0.0%	4.2%	8.3%	87.5%	0.0%
10歳代	30	5	7	18	0	1	1	28	0	5	4	21	0	0	0	30	0
	100.0%	16.7%	23.3%	60.0%	0.0%	3.3%	3.3%	93.3%	0.0%	16.7%	13.3%	70.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%
20歳代	51	12	11	28	0	1	2	48	0	17	5	29	0	2	2	47	0
	100.0%	23.5%	21.6%	54.9%	0.0%	2.0%	3.9%	94.1%	0.0%	33.3%	9.8%	56.9%	0.0%	3.9%	3.9%	92.2%	0.0%
30歳代	76	17	18	41	0	4	5	67	0	24	10	42	0	4	12	60	0
	100.0%	22.4%	23.7%	53.9%	0.0%	5.3%	6.6%	88.2%	0.0%	31.6%	13.2%	55.3%	0.0%	5.3%	15.8%	78.9%	0.0%
40歳代	126	24	29	71	2	5	9	110	2	39	14	70	3	7	10	108	1
	100.0%	19.0%	23.0%	56.3%	1.6%	4.0%	7.1%	87.3%	1.6%	31.0%	11.1%	55.6%	2.4%	5.6%	7.9%	85.7%	0.8%
50歳代	226	46	40	139	1	12	14	199	1	40	23	160	3	16	30	177	3
	100.0%	20.4%	17.7%	61.5%	0.4%	5.3%	6.2%	88.1%	0.4%	17.7%	10.2%	70.8%	1.3%	7.1%	13.3%	78.3%	1.3%
60歳代	426	69	92	261	4	25	29	370	2	23	30	372	1	7	41	377	1
	100.0%	16.2%	21.6%	61.3%	0.9%	5.9%	6.8%	86.9%	0.5%	5.4%	7.0%	87.3%	0.2%	1.6%	9.6%	88.5%	0.2%
70歳代	724	119	99	499	7	25	34	661	4	18	13	690	3	12	31	678	3
	100.0%	16.4%	13.7%	68.9%	1.0%	3.5%	4.7%	91.3%	0.6%	2.5%	1.8%	95.3%	0.4%	1.7%	4.3%	93.6%	0.4%
80歳代	779	127	103	534	15	18	20	735	6	4	4	765	6	7	14	752	6
	100.0%	16.3%	13.2%	68.5%	1.9%	2.3%	2.6%	94.4%	0.8%	0.5%	0.5%	98.2%	0.8%	0.9%	1.8%	96.5%	0.8%
90歳以上	282	34	32	208	8	5	3	270	4	0	0	278	4	1	2	275	4
	100.0%	12.1%	11.3%	73.8%	2.8%	1.8%	1.1%	95.7%	1.4%	0.0%	0.0%	98.6%	1.4%	0.4%	0.7%	97.5%	1.4%

	テレビ				手話・字幕放送				ラジオ				自治体広報			
	よく 情報を 得	と とき どき 情報	を ま つ た く 情 報	無 回 答	よく 情報 を得	と とき どき 情報	を ま つ た く 情 報	無 回 答	よく 情報 を得	と とき どき 情報	を ま つ た く 情 報	無 回 答	よく 情報 を得	と とき どき 情報	を ま つ た く 情 報	無 回 答
総数	823 30.0%	633 23.1%	1232 44.9%	56 2.0%	153 5.6%	123 4.5%	2450 89.3%	18 0.7%	442 16.1%	225 8.2%	2045 74.5%	32 1.2%	126 4.6%	303 11.0%	2295 83.6%	20 0.7%
10歳未満	6 25.0%	6 25.0%	12 50.0%	0 0.0%	2 8.3%	2 8.3%	20 83.3%	0 0.0%	3 12.5%	0 0.0%	21 87.5%	0 0.0%	1 4.2%	1 4.2%	22 91.7%	0 0.0%
10歳代	7 23.3%	9 30.0%	14 46.7%	0 0.0%	2 6.7%	1 3.3%	27 90.0%	0 0.0%	1 3.3%	2 6.7%	27 90.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	30 100.0%	0 0.0%
20歳代	17 33.3%	6 11.8%	28 54.9%	0 0.0%	10 19.6%	5 9.8%	36 70.6%	0 0.0%	1 2.0%	6 11.8%	44 86.3%	0 0.0%	1 2.0%	2 3.9%	48 94.1%	0 0.0%
30歳代	29 38.2%	15 19.7%	32 42.1%	0 0.0%	18 23.7%	8 10.5%	50 65.8%	0 0.0%	6 7.9%	3 3.9%	67 88.2%	0 0.0%	3 3.9%	4 5.3%	69 90.8%	0 0.0%
40歳代	53 42.1%	35 27.8%	35 27.8%	3 2.4%	18 14.3%	15 11.9%	92 73.0%	1 0.8%	13 10.3%	7 5.6%	105 83.3%	1 0.8%	7 5.6%	19 15.1%	98 77.8%	2 1.6%
50歳代	81 35.8%	59 26.1%	83 36.7%	3 1.3%	32 14.2%	28 12.4%	165 73.0%	1 0.4%	31 13.7%	14 6.2%	180 79.6%	1 0.4%	15 6.6%	39 17.3%	170 75.2%	2 0.9%
60歳代	140 32.9%	108 25.4%	172 40.4%	6 1.4%	31 7.3%	29 6.8%	365 85.7%	1 0.2%	79 18.5%	43 10.1%	299 70.2%	5 1.2%	30 7.0%	70 16.4%	325 76.3%	1 0.2%
70歳代	224 30.9%	161 22.2%	324 44.8%	15 2.1%	20 2.8%	24 3.3%	675 93.2%	5 0.7%	158 21.8%	72 9.9%	487 67.3%	7 1.0%	36 5.0%	90 12.4%	595 82.2%	3 0.4%
80歳代	222 28.5%	166 21.3%	370 47.5%	21 2.7%	20 2.6%	9 1.2%	744 95.5%	6 0.8%	126 16.2%	60 7.7%	581 74.6%	12 1.5%	30 3.9%	61 7.8%	680 87.3%	8 1.0%
90歳以上	44 15.6%	68 24.1%	162 57.4%	8 2.8%	0 0.0%	2 0.7%	276 97.9%	4 1.4%	24 8.5%	18 6.4%	234 83.0%	6 2.1%	3 1.1%	17 6.0%	258 91.5%	4 1.4%

視聴覚障害組み合わせ（等級）と手段別情報入手頻度

表 2-2-46b 視聴覚障害組み合わせ（等級）と手段別情報入手頻度

	総数	一般図書・新聞雑誌				録音図書・点字図書				インターネット				ファックス			
		よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答
総数	2744	455	436	1816	37	97	118	2510	19	172	105	2447	20	57	144	2525	18
	100.0%	16.6%	15.9%	66.2%	1.3%	3.5%	4.3%	91.5%	0.7%	6.3%	3.8%	89.2%	0.7%	2.1%	5.2%	92.0%	0.7%
視覚1・2級 聴覚1・2級	860	121	118	609	12	26	35	794	5	58	37	758	7	28	59	767	6
	100.0%	14.1%	13.7%	70.8%	1.4%	3.0%	4.1%	92.3%	0.6%	6.7%	4.3%	88.1%	0.8%	3.3%	6.9%	89.2%	0.7%
視覚1・2級 聴覚3～6級	762	89	116	550	7	57	64	635	6	57	36	664	5	4	29	724	5
	100.0%	11.7%	15.2%	72.2%	0.9%	7.5%	8.4%	83.3%	0.8%	7.5%	4.7%	87.1%	0.7%	0.5%	3.8%	95.0%	0.7%
視覚3～6級 聴覚1・2級	141	29	34	76	2	1	2	137	1	16	8	115	2	8	25	107	1
	100.0%	20.6%	24.1%	53.9%	1.4%	0.7%	1.4%	97.2%	0.7%	11.3%	5.7%	81.6%	1.4%	5.7%	17.7%	75.9%	0.7%
視覚3～6級 聴覚3～6級	602	166	126	300	10	2	4	593	3	27	15	557	3	10	22	567	3
	100.0%	27.6%	20.9%	49.8%	1.7%	0.3%	0.7%	98.5%	0.5%	4.5%	2.5%	92.5%	0.5%	1.7%	3.7%	94.2%	0.5%
無回答	379	50	42	281	6	11	13	351	4	14	9	353	3	7	9	360	3
	100.0%	13.2%	11.1%	74.1%	1.6%	2.9%	3.4%	92.6%	1.1%	3.7%	2.4%	93.1%	0.8%	1.8%	2.4%	95.0%	0.8%

	テレビ				手話・字幕放送				ラジオ				自治体広報			
	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答												
総数	823	633	1232	56	153	123	2450	18	442	225	2045	32	126	303	2295	20
	30.0%	23.1%	44.9%	2.0%	5.6%	4.5%	89.3%	0.7%	16.1%	8.2%	74.5%	1.2%	4.6%	11.0%	83.6%	0.7%
視覚1・2級 聴覚1・2級	204	178	463	15	73	55	725	7	95	53	702	10	23	85	745	7
	23.7%	20.7%	53.8%	1.7%	8.5%	6.4%	84.3%	0.8%	11.0%	6.2%	81.6%	1.2%	2.7%	9.9%	86.6%	0.8%
視覚1・2級 聴覚3～6級	241	168	341	12	17	25	716	4	206	94	454	8	46	88	623	5
	31.6%	22.0%	44.8%	1.6%	2.2%	3.3%	94.0%	0.5%	27.0%	12.3%	59.6%	1.0%	6.0%	11.5%	81.8%	0.7%
視覚3～6級 聴覚1・2級	42	38	59	2	33	13	94	1	7	5	127	2	7	19	113	2
	29.8%	27.0%	41.8%	1.4%	23.4%	9.2%	66.7%	0.7%	5.0%	3.5%	90.1%	1.4%	5.0%	13.5%	80.1%	1.4%
視覚3～6級 聴覚3～6級	258	165	161	18	18	24	557	3	62	44	489	7	35	85	479	3
	42.9%	27.4%	26.7%	3.0%	3.0%	4.0%	92.5%	0.5%	10.3%	7.3%	81.2%	1.2%	5.8%	14.1%	79.6%	0.5%
無回答	78	84	208	9	12	6	358	3	72	29	273	5	15	26	335	3
	20.6%	22.2%	54.9%	2.4%	3.2%	1.6%	94.5%	0.8%	19.0%	7.7%	72.0%	1.3%	4.0%	6.9%	88.4%	0.8%

視聴覚障害組み合わせ（状態）と手段別情報入手頻度

表 2-2-46c 視聴覚障害組み合わせ（状態）と手段別情報入手頻度

	総数	一般図書・新聞雑誌				録音図書・点字図書				インターネット				ファックス			
		よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答
総数	2744	455	436	1816	37	97	118	2510	19	172	105	2447	20	57	144	2525	18
	100.0%	16.6%	15.9%	66.2%	1.3%	3.5%	4.3%	91.5%	0.7%	6.3%	3.8%	89.2%	0.7%	2.1%	5.2%	92.0%	0.7%
全盲ろう	315	16	23	273	3	11	17	285	2	17	16	280	2	7	19	288	1
	100.0%	5.1%	7.3%	86.7%	1.0%	3.5%	5.4%	90.5%	0.6%	5.4%	5.1%	88.9%	0.6%	2.2%	6.0%	91.4%	0.3%
全盲難聴	645	22	59	559	5	54	53	531	7	23	18	599	5	0	14	626	5
	100.0%	3.4%	9.1%	86.7%	0.8%	8.4%	8.2%	82.3%	1.1%	3.6%	2.8%	92.9%	0.8%	0.0%	2.2%	97.1%	0.8%
弱視ろう	333	83	84	157	9	0	7	323	3	43	21	263	6	26	45	258	4
	100.0%	24.9%	25.2%	47.1%	2.7%	0.0%	2.1%	97.0%	0.9%	12.9%	6.3%	79.0%	1.8%	7.8%	13.5%	77.5%	1.2%
弱視難聴	1207	292	228	673	14	28	36	1138	5	80	42	1080	5	18	54	1129	6
	100.0%	24.2%	18.9%	55.8%	1.2%	2.3%	3.0%	94.3%	0.4%	6.6%	3.5%	89.5%	0.4%	1.5%	4.5%	93.5%	0.5%
無回答	244	42	42	154	6	4	5	233	2	9	8	225	2	6	12	224	2
	100.0%	17.2%	17.2%	63.1%	2.5%	1.6%	2.0%	95.5%	0.8%	3.7%	3.3%	92.2%	0.8%	2.5%	4.9%	91.8%	0.8%

	テレビ				手話・字幕放送				ラジオ				自治体広報			
	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答												
総数	823	633	1232	56	153	123	2450	18	442	225	2045	32	126	303	2295	20
	30.0%	23.1%	44.9%	2.0%	5.6%	4.5%	89.3%	0.7%	16.1%	8.2%	74.5%	1.2%	4.6%	11.0%	83.6%	0.7%
全盲ろう	28	27	256	4	14	12	288	1	7	11	296	1	3	18	293	1
	8.9%	8.6%	81.3%	1.3%	4.4%	3.8%	91.4%	0.3%	2.2%	3.5%	94.0%	0.3%	1.0%	5.7%	93.0%	0.3%
全盲難聴	116	117	402	10	4	6	630	5	206	92	335	12	32	46	561	6
	18.0%	18.1%	62.3%	1.6%	0.6%	0.9%	97.7%	0.8%	31.9%	14.3%	51.9%	1.9%	5.0%	7.1%	87.0%	0.9%
弱視ろう	100	95	131	7	72	45	211	5	8	6	315	4	16	40	271	6
	30.0%	28.5%	39.3%	2.1%	21.6%	13.5%	63.4%	1.5%	2.4%	1.8%	94.6%	1.2%	4.8%	12.0%	81.4%	1.8%
弱視難聴	496	349	339	23	48	52	1103	4	193	103	900	11	66	167	969	5
	41.1%	28.9%	28.1%	1.9%	4.0%	4.3%	91.4%	0.3%	16.0%	8.5%	74.6%	0.9%	5.5%	13.8%	80.3%	0.4%
無回答	83	45	104	12	15	8	218	3	28	13	199	4	9	32	201	2
	34.0%	18.4%	42.6%	4.9%	6.1%	3.3%	89.3%	1.2%	11.5%	5.3%	81.6%	1.6%	3.7%	13.1%	82.4%	0.8%

視聴覚障害経緯（5分類）と手段別情報入手頻度

表 2-2-46d 視聴覚障害経緯（5分類）と手段別情報入手頻度

	総数	一般図書・新聞雑誌				録音図書・点字図書				インターネット				ファックス			
		よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答
総数	2744	455	436	1816	37	97	118	2510	19	172	105	2447	20	57	144	2525	18
	100.0%	16.6%	15.9%	66.2%	1.3%	3.5%	4.3%	91.5%	0.7%	6.3%	3.8%	89.2%	0.7%	2.1%	5.2%	92.0%	0.7%
先天性	219	33	40	143	3	6	10	202	1	21	23	174	1	8	17	194	0
	100.0%	15.1%	18.3%	65.3%	1.4%	2.7%	4.6%	92.2%	0.5%	9.6%	10.5%	79.5%	0.5%	3.7%	7.8%	88.6%	0.0%
盲ベース	143	29	25	88	1	16	15	111	1	15	11	116	1	2	12	128	1
	100.0%	20.3%	17.5%	61.5%	0.7%	11.2%	10.5%	77.6%	0.7%	10.5%	7.7%	81.1%	0.7%	1.4%	8.4%	89.5%	0.7%
ろうベース	335	62	69	201	3	6	13	315	1	59	27	245	4	21	46	266	2
	100.0%	18.5%	20.6%	60.0%	0.9%	1.8%	3.9%	94.0%	0.3%	17.6%	8.1%	73.1%	1.2%	6.3%	13.7%	79.4%	0.6%
後天性（成人期）	1503	256	242	990	15	56	71	1368	8	68	35	1393	7	21	51	1423	8
	100.0%	17.0%	16.1%	65.9%	1.0%	3.7%	4.7%	91.0%	0.5%	4.5%	2.3%	92.7%	0.5%	1.4%	3.4%	94.7%	0.5%
後天性（高齢期）	276	40	29	199	8	3	2	268	3	0	1	272	3	2	6	265	3
	100.0%	14.5%	10.5%	72.1%	2.9%	1.1%	0.7%	97.1%	1.1%	0.0%	0.4%	98.6%	1.1%	0.7%	2.2%	96.0%	1.1%
無回答	268	35	31	195	7	10	7	246	5	9	8	247	4	3	12	249	4
	100.0%	13.1%	11.6%	72.8%	2.6%	3.7%	2.6%	91.8%	1.9%	3.4%	3.0%	92.2%	1.5%	1.1%	4.5%	92.9%	1.5%

	テレビ				手話・字幕放送				ラジオ				自治体広報			
	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答												
総数	823	633	1232	56	153	123	2450	18	442	225	2045	32	126	303	2295	20
	30.0%	23.1%	44.9%	2.0%	5.6%	4.5%	89.3%	0.7%	16.1%	8.2%	74.5%	1.2%	4.6%	11.0%	83.6%	0.7%
先天性	69	42	107	1	18	16	185	0	19	11	189	0	12	23	184	0
	31.5%	19.2%	48.9%	0.5%	8.2%	7.3%	84.5%	0.0%	8.7%	5.0%	86.3%	0.0%	5.5%	10.5%	84.0%	0.0%
盲ベース	60	35	46	2	9	7	126	1	38	18	86	1	8	30	104	1
	42.0%	24.5%	32.2%	1.4%	6.3%	4.9%	88.1%	0.7%	26.6%	12.6%	60.1%	0.7%	5.6%	21.0%	72.7%	0.7%
ろうベース	90	77	163	5	62	40	231	2	18	10	303	4	16	46	269	4
	26.9%	23.0%	48.7%	1.5%	18.5%	11.9%	69.0%	0.6%	5.4%	3.0%	90.4%	1.2%	4.8%	13.7%	80.3%	1.2%
後天性（成人期）	478	351	644	30	52	51	1392	8	285	152	1049	17	71	166	1259	7
	31.8%	23.4%	42.8%	2.0%	3.5%	3.4%	92.6%	0.5%	19.0%	10.1%	69.8%	1.1%	4.7%	11.0%	83.8%	0.5%
後天性（高齢期）	58	69	139	10	4	3	266	3	40	13	217	6	7	16	250	3
	21.0%	25.0%	50.4%	3.6%	1.4%	1.1%	96.4%	1.1%	14.5%	4.7%	78.6%	2.2%	2.5%	5.8%	90.6%	1.1%
無回答	68	59	133	8	8	6	250	4	42	21	201	4	12	22	229	5
	25.4%	22.0%	49.6%	3.0%	3.0%	2.2%	93.3%	1.5%	15.7%	7.8%	75.0%	1.5%	4.5%	8.2%	85.4%	1.9%

最も円滑な発信コミュニケーション方法と手段別情報入手頻度

表 2-2-46e 最も円滑な発信コミュニケーション方法と手段別情報入手頻度

	総数	一般図書・新聞雑誌				録音図書・点字図書				インターネット				ファックス			
		よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答
総数	2744	455	436	1816	37	97	118	2510	19	172	105	2447	20	57	144	2525	18
	100.0%	16.6%	15.9%	66.2%	1.3%	3.5%	4.3%	91.5%	0.7%	6.3%	3.8%	89.2%	0.7%	2.1%	5.2%	92.0%	0.7%
音声（発話）	1795	288	276	1206	25	81	91	1611	12	97	52	1635	11	14	68	1702	11
	100.0%	16.0%	15.4%	67.2%	1.4%	4.5%	5.1%	89.7%	0.7%	5.4%	2.9%	91.1%	0.6%	0.8%	3.8%	94.8%	0.6%
手話	198	42	47	109	0	3	6	189	0	35	27	134	2	27	44	127	0
	100.0%	21.2%	23.7%	55.1%	0.0%	1.5%	3.0%	95.5%	0.0%	17.7%	13.6%	67.7%	1.0%	13.6%	22.2%	64.1%	0.0%
指文字	25	0	2	22	1	0	4	20	1	1	2	21	1	0	0	25	0
	100.0%	0.0%	8.0%	88.0%	4.0%	0.0%	16.0%	80.0%	4.0%	4.0%	8.0%	84.0%	4.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%
文字	248	50	51	142	5	4	5	237	2	21	9	216	2	10	17	219	2
	100.0%	20.2%	20.6%	57.3%	2.0%	1.6%	2.0%	95.6%	0.8%	8.5%	3.6%	87.1%	0.8%	4.0%	6.9%	88.3%	0.8%
その他	95	6	8	79	2	1	3	89	2	2	6	85	2	1	3	89	2
	100.0%	6.3%	8.4%	83.2%	2.1%	1.1%	3.2%	93.7%	2.1%	2.1%	6.3%	89.5%	2.1%	1.1%	3.2%	93.7%	2.1%
特にない	258	43	29	184	2	4	4	249	1	6	2	249	1	1	4	252	1
	100.0%	16.7%	11.2%	71.3%	0.8%	1.6%	1.6%	96.5%	0.4%	2.3%	0.8%	96.5%	0.4%	0.4%	1.6%	97.7%	0.4%
無回答	125	26	23	74	2	4	5	115	1	10	7	107	1	4	8	111	2
	100.0%	20.8%	18.4%	59.2%	1.6%	3.2%	4.0%	92.0%	0.8%	8.0%	5.6%	85.6%	0.8%	3.2%	6.4%	88.8%	1.6%

	テレビ				手話・字幕放送				ラジオ				自治体広報			
	よく情報を得る	ときどき情報を得る	まったく情報を得ない	無回答												
総数	823	633	1232	56	153	123	2450	18	442	225	2045	32	126	303	2295	20
	30.0%	23.1%	44.9%	2.0%	5.6%	4.5%	89.3%	0.7%	16.1%	8.2%	74.5%	1.2%	4.6%	11.0%	83.6%	0.7%
音声（発話）	584	450	727	34	42	56	1687	10	391	189	1194	21	88	206	1489	12
	32.5%	25.1%	40.5%	1.9%	2.3%	3.1%	94.0%	0.6%	21.8%	10.5%	66.5%	1.2%	4.9%	11.5%	83.0%	0.7%
手話	57	43	97	1	61	35	102	0	1	0	197	0	10	24	163	1
	28.8%	21.7%	49.0%	0.5%	30.8%	17.7%	51.5%	0.0%	0.5%	0.0%	99.5%	0.0%	5.1%	12.1%	82.3%	0.5%
指文字	0	5	20	0	1	1	23	0	0	3	22	0	0	1	24	0
	0.0%	20.0%	80.0%	0.0%	4.0%	4.0%	92.0%	0.0%	0.0%	12.0%	88.0%	0.0%	0.0%	4.0%	96.0%	0.0%
文字	54	59	126	9	25	17	203	3	3	7	234	4	9	27	209	3
	21.8%	23.8%	50.8%	3.6%	10.1%	6.9%	81.9%	1.2%	1.2%	2.8%	94.4%	1.6%	3.6%	10.9%	84.3%	1.2%
その他	6	11	75	3	4	2	87	2	4	4	84	3	2	5	86	2
	6.3%	11.6%	78.9%	3.2%	4.2%	2.1%	91.6%	2.1%	4.2%	4.2%	88.4%	3.2%	2.1%	5.3%	90.5%	2.1%
特にない	84	42	126	6	4	4	249	1	31	13	210	4	12	22	223	1
	32.6%	16.3%	48.8%	2.3%	1.6%	1.6%	96.5%	0.4%	12.0%	5.0%	81.4%	1.6%	4.7%	8.5%	86.4%	0.4%
無回答	38	23	61	3	16	8	99	2	12	9	104	0	5	18	101	1
	30.4%	18.4%	48.8%	2.4%	12.8%	6.4%	79.2%	1.6%	9.6%	7.2%	83.2%	0.0%	4.0%	14.4%	80.8%	0.8%

盲ろう者に対する文字情報支援への 要約筆記者活用の可能性に関する研究

研究分担者 三宅 初穂 特定非営利活動法人 全国要約筆記問題研究会

研究要旨 現任の登録要約筆記者が、盲ろう者に対する知識を習得し、介助の知識と技術の学習をとおして、新しい社会資源として活用の道を作ることを考察した。

聴覚障害者を対象として発展してきた要約筆記の誕生から、専門性を求められる社会意識の変化、社会福祉法における第二種社会福祉事業に組み込まれた道をたどり、専門性は当該者の権利擁護につながることを概観してきた。

盲ろう者支援の制度が当該者にとって十全のものではない現状から、文字による通訳が必要とされるケースで、登録要約筆記者のスキルを活かすためのカリキュラムを検討した。視覚障害に必要な支援技術は同行援助や状況説明などがあり、文字で通訳を受けたい盲ろう者の支援には「要約筆記」のスキル以外にこれらの知識と技術が必要になることが明らかになった。

本研究では、平成23年に示された「要約筆記者養成カリキュラム」、同25年に示された「盲ろう者向け通訳・介助員養成カリキュラム」を比較検討し、登録要約筆記者が盲ろう者に文字による支援活動をするための学習内容、必要時間数等を明らかにした。本研究のカリキュラム案をさらに有効に機能させるには現行制度に反映させる方策が求められる。

1 盲ろう者向け通訳介助員養成・派遣事業 の現状と課題

1-1 盲ろう者の実情と福祉施策の現状

「盲ろう者」という呼称自体、明確な定義はない。身体障害者福祉法による視覚と聴覚の両方の障害が記載されている人を一般には「盲ろう者」と呼び、福祉サービスの対象としてとらえている。

厚生労働省の調査¹によれば、視覚障害者は

316000人、聴覚言語障害者は324000人と推計されているが、両者の重複に関しては、この調査では対象とされていない。

平成24年度に実施された「障害者総合福祉推進事業（厚生労働省補助事業）」によれば、「身体障害者手帳に視覚と聴覚の両方の障害が記載されているもの（盲ろう者）が、全国で、約1万4千人いることが確認できた（中略）」²とされている。この調査は都道府県、政令指定都市、中核市の協力を得て行われたものであり、現状

¹ 「平成23年生活のしづらさなどに関する調査（全国在宅障害児・者等実態調査）結果」
平成25年6月 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部

² 「厚生労働省平成24年度障害者総合福祉推進事業 盲ろう者に関する実態調査報告書」
平成25年3月 社会福祉法人全国盲ろう者協会

では一番精度の高いものと考えられる。

一方、全国盲ろう者協会では、「視覚と聴覚に何らかの障害を併せ持っている」と認められれば、等級のいかんにかかわらず「盲ろう者」として扱う³としている。視覚、聴覚ともに日常生活に際し、不自由をきたしている人という社会モデル的なとらえ方である。

盲ろう者の障害の様態によって4種類に大別される。

		目が不自由	
		全盲	弱視
耳が不自由	全聾	全盲全聾	弱視全聾
	難聴	全盲難聴	弱視難聴

障害の程度に差があっても、盲ろう者も「聞こえないこと、あるいは聞こえづらいこと」「見えないこと、あるいは見づらいこと」を抱える。その多様性の大きさが盲ろう者の障害特性であり、その支援の方法は個別性が高い。今回の研究では、時間的、人力的、経済的な制約により十分な当事者への聞き取り調査にはなりえなかった。そのうちのある部分は当該障害者の情報獲得の困難さであり、支援者等の理解度の確認のむずかしさにあったともいえる。

前述した「盲ろう者に関する実態調査報告書」では、当該者のコミュニケーション手段を問う際に、「最も円滑な発信コミュニケーション方法」「最も円滑な受信コミュニケーション方法」という表現を使っており、視覚、聴覚の状況の設問も多種にわたる。

視覚；光も感じない・明るい光は見える・目の

前で手を動かせばわかる・目の前の指の本数が数えられる・大きな文字読める・小さな文字を読める

(視野の状況)；視野に障害はない・中心が見えにくい・周辺が見えにくい

聴覚；音声・手話・触手話・指文字・文字(筆談・空書き・手のひら書き)・点字・指点字

など、設問あるいは回答の多様であること、これらが複雑に絡み合っていることはコミュニケーションのみならず生活のすべての場面で困難が生じていることを物語る。

盲ろう者向け通訳・介助員派遣は、平成25年4月から障害者総合支援法の地域生活支援事業に位置付けられ、都道府県、政令指定都市、中核市の必須事業とされている。また、同養成研修も都道府県(政令指定都市・中核市)の必須事業となっており、このためのカリキュラムは平成25年に厚生労働省から示されている。

平成28年3月に行われた障害保健福祉関係主管課長会議において、平成26年度の実施状況の報告がされている⁴。「2(4)盲ろう者向け福祉施策 ア 盲ろう者向け通訳・介助員派遣事業等の推進」として、「(前略)都道府県のみならず、指定都市及び中核市においても実施していただくようお願いしたい。なお、指定都市及び中核市において盲ろう者向け通訳・介助員派遣事業が実施される間も、盲ろう者向け通訳・介助員の派遣が受けられるよう都道府県と連携するようご留意いただきたい」とされている。

26年度末現在の都道府県における実施状況は47都道府県において以下のように報告されている。

派遣対象盲ろう者数；918人、通訳・介助員数；5368人となっており、利用時間の上限が示されている箇所は32都道府県。その上限の示し

³ 「盲ろう者への通訳・介助—「光」と「音」を伝えるための方法と技術」

2008年 社会福祉法人全国盲ろう者協会編

⁴ 「障害保健福祉関係主管課長会議資料」

平成28年3月 厚生労働省社会援護局障害保健福祉部企画課自立支援振興室

方は、年間では 156 時間から 1080 時間まで、月間 20 時間、1 日 8 時間以内、さらには予算の範囲内で受託団体が調整などさまざまである⁵。

また、福祉サービスの利用の面では、視覚障害者を対象とした介護給付として同行援護、聴覚障害者を対象とした地域生活支援事業として要約筆記者派遣事業がある。これらを必要に応じて組み合わせて利用する実情もあり、聴覚障害者向けに要約筆記を援用することは盲ろう者の情報獲得にとっては不十分であることも調査結果として表れている。

なお、本研究では対象となるのは、情報獲得の際に文字による提供をもとめる人たちであり、正確には弱視ろう、弱視難聴ということになるが、「盲ろう者向け通訳・介助員事業」等の名称に合わせて「盲ろう者」として表記する。

1-2 個別的支援の在り方

ここでは、視覚障害はあるが全盲ではなく、聴覚障害を補う手段として文字情報支援（文字による通訳その他の支援）を必要とする人を対象に論を進めることになるが、障害の状況の幅広さとコミュニケーション方法の多様性は掛け算でその困難度を増加させる。

聴覚と視覚に二重の障害を持つ人々が抱える主な困難は、コミュニケーション、情報摂取、移動の3つ⁶といわれる。二重に障害を持つ原因はいろいろあるが、中でもアッシャー症候群を持つ人はすべてのろうの子供のうち約3～6%いるといわれている。難聴の子供も同率のアッシャー症候群がいるといわれる⁷。聴覚障害から視覚障害に至る盲ろう者の中でも多いケースで

ある。

盲ろう者の支援を前段の3つの主な困難から検討し、それぞれに必要な支援を探ることで個人にとって、より適切な支援を作り出すことができると考え、上記に上げられた「主な3つ」の困難に沿ってみていく。

コミュニケーションをその機能から見ると2つの側面をあげることができる。1つは直接のコミュニケーション、人との対話である。これを文字で行おうとすれば「筆談」になる。もう1つは第3者として通訳が介在する通訳行為としての文字、すなわち「要約筆記」ということになる。

情報摂取に関していえば、視覚障害の部分を補う方法としては補聴機器等の使用による副声的な状況説明である。状況説明を文字で行うケースもある。この場合、中心的に文字による通訳行為のコミュニケーション支援をしつつ、状況説明を加えることになるが、この2つを表出の仕方で区別するのは困難で、利用者と提供者間での約束事の確立され具合に左右するといえる。

移動に関しては、基本的には視覚障害者の利用する同行援護の支援になる。その途中に音声情報が生じた場合、耳元での情報提供が可能であれば両方同時の支援を成立できるが、音声による情報提供が難しいケースでは手のひら書き等の方法になる。しかし、歩行中は困難になる。盲ろう者が文字支援を必要とする場面で、会場に設置された聴覚障害者用の全体投影のパソコン要約筆記に接続して利用するケースがある。会場までの移動支援やそこまでの状況説明は介助者が行い、会場内での音声情報のみスクリーンに文字で表示されたものを最前列で見る。また、入力された文字を手元に設置した個人のパソコンモニターにつなぎ文字を大きく表示して利用するという方法をとる。この方法は大きめの文字なら読めることが前提になるが、実際に

⁵ 上記資料 63 ページ 資料 2-11

⁶ 盲ろう者の屋外歩行の現状と課題 ～大阪府の盲ろう者団体利用者を事例に～
2013年2月北野幹夫・足立啓 日本建築学会技術報告集 第19巻

⁷ 「アッシャー(Usher) 症候群の盲ろう者の就労継続支援のあり方」

2009年1月 松谷直美 社会事業研究 48号

は聴覚障害者用の文字の表出なので、大きさ、送り等が個人に対応しているとはいえ、その場で理解しきることが困難で満足度は高くない。全体投影が設置されていても、当該者は個別性を重視した文字による通訳支援が必要だと考えるべきだろう。

とくにこのケースでは、要約筆記者や要約筆記派遣の事業体等で、盲ろう者に対する支援の知識を持たないまま、会場のパソコンにつながる方法に躊躇することは多い。要約筆記技術を習得し、対人支援を学んできた要約筆記者が、盲ろう者への知識のないままに情報保障を担うことに迷いが生じるのは当然といえる。

コミュニケーションはもちろん、その場の状況を何らかの方法で知ることは当然の権利としてあり、その方法の提案は個別性を重視するオンデマンドであるべきだろう。会場に設置された要約筆記を援用することで満足する状況は改善させなければならない。

盲ろう者自身も、支援者等も現状の支援体制から一歩進める意識を持って息長く新しい支援方法とその担い手の拡大を図るべきであると考ええる。

1-3 制度構築への検討

障害者総合支援法により、現在、盲ろう者の支援として用いられている制度は前述したが、これだけで十分な体制の取れていないことは明らかである。たとえば、視覚障害の部分カバーする同行援護に関しても、視覚障害者団体による報告書にその問題点が記されている。「同行援護事業が自立支援給付として位置付けられ、全国一律の制度となった今日においても、自治体による理解が不十分であったり、財政的な制約も含め自治体による独自の判断が入り込んでいるため、「地域間格差」とも言うべき運用上の相違が生じている⁸⁾」と関係者は認識している。

⁸⁾ 「厚生労働省平成26年度障害者総合福祉推進事業 「視

さらに、「地域生活では、ろう重複障害者の生活問題が家族の中にとどめられる傾向があり、問題を社会化するため、行政、相談支援事業所、通所・入所施設等が、どのようなネットワークを構築し、各々がどのような役割を果たしていくのかを明らかにしていくことも重要となっている。」⁹⁾とあるように、地域生活の充実、社会参加の拡大を図るための総合的な支援体制が求められる。

こうしたなかで、既存のリソースを新たな視点で見直し、横断的に社会資源として活用する方策も考えられる必要がある。

本研究で主目標としたのは、盲ろう者向け通訳・介助員の増大に向けて登録要約筆記者の活用の検討である。聴覚障害、中でも手話を主なコミュニケーション手段としない中途失聴者や難聴者に提供されている要約筆記、これは文字を通訳として表出するが、一般に全体投影という方法はスタンダードな方法しかとりえない。会場にいる利用者は多数であり、存在を確認できないケースもある。従って、要約筆記として用意されたものを盲ろう者が利用するとするならば、手書きであれば、スクリーンに常時映し出される文字が読める距離に盲ろう者の席を確保する必要が生じる。パソコン要約筆記の全体投影であれば、スクリーンで見られる文字の大きさとそのつど表出する文字数(行)の確認が必要である。それのできない場合には、LANケーブルを使い、表示用パソコンに盲ろうの利用者の手元に用意したパソコンに投影する方法になる。この場合、手元のパソコンは全体に映し出す「1行15文字、6行」といった一般に表示する表出の様式でなく、個別のニーズに沿って文

覚障害者の移動支援の在り方に関する実態調査報告書」
平成27年3月 社会福祉法人日本盲人会連合

⁹⁾ 「ろう重複障害の支援に関する調査事業報告書 一人一人が輝く社会をめざして」

2013年3月 社会福祉法人埼玉聴覚障害者福祉会・全国ろう重複障害者施設連絡協議会

字の大きさや行間を調整できる。しかし、これもあくまでも全体に映し出す一般的な文字数にしたがって文章化されており、個別のニーズを満たすものとは言い切れない。

現任の登録要約筆記者の学んできた表記、表出では対応できない。盲ろう者にあつた文字数や行間等の表記、画面設定、文字が大きくなる場合のスクロールの状況と読み切れる文章量と要約率の関係など、詳細に分析する必要がある。さらに、盲ろう者の社会参加の真の意義を考えたとき、地域生活において、家族や友人にのみ介助を委ねるのでなく、ノートテイクを活用することで外出がしやすくなることが考えられる。この場合、要約筆記者は文字による通訳作業の習得だけでは不足であるから、盲ろう者に対する知識を習得し、介助の知識と技術の学習をおして、新しい社会資源として活用の道を作ることが望ましいと考えられる。

聴覚障害者を対象として発展してきた要約筆記、その担い手である要約筆記者が幅広い文字通訳支援と文字情報支援、さらに介助員の役割を併せ持った従事者として福祉制度の中に組み込むことができるなら、新たな制度の広がりを持つことになろう。

2 今日の要約筆記制度までの過程と要約筆記の通訳性の確立

要約筆記が、利用者である中途失聴・難聴者のコミュニケーション支援としてどのように要約筆記制度に至ったかをみていく。

音声情報が耳から入らないという不利は、不便さや不合理のみならず、聴覚障害者の社会生活においては多くの権利の剥奪を意味していた。社会、公共の場にあるときはもちろん、まったくのひとりである以外は、私的領域である家族の中でさえ音声によるコミュニケーションの中に存在できなかった。「市民社会の論理は、コン

フリクトと協調を基礎とする。それらはまた、連帯と社会化、市民的徳性と普遍的福祉を志向する」¹⁰とするなら、聴覚障害者は、そうした場に音声コミュニケーションを持たずには立会いにくかった。しかし、それらは当人にも自覚されにくかったし、心理的葛藤から隠されてきた面もある。その意味で、市民権を剥奪されているという実感を持つ聴覚障害者は少ない。なぜなら、井戸端会議から抽象度の高い議論まで、コミュニケーションの場で意思疎通が成立した体験が少ないこと、さらにそれを聞こえる他人と比べて自覚することも少ないからだと考えられる。したがって、当事者からの発信も少なく、そして、社会は、「外見からは障害の見えない」聴覚障害者の存在に気づきにくいままにある。自身も中途失聴者である心理学者の故山口利勝氏は、「(聴覚障害者は)透明人間のような存在」と述べている¹¹。このことは、聴覚障害者がその場にいるにもかかわらず、周囲から自分の存在が確認されていないという感覚をつねに感じていることを示している。

2-1 要約筆記の誕生

1960年代後半には、小中学校に教材として、ライトスコープ、現在のOHP (Over Head Projector) が整備されてきたが、これを使って会議の発言を書き、多数の人が同時に見られるようにする試みがされた。東京や京都では比較的早い時期から、難聴者が集まる機会ができていた。ろう者の集まりに手話のわからない聴覚障害者が来るようになったことから、ろう者の支援としてその場にいた手話通訳者も、手話で通じにくい聴覚障害者の存在を認識するようになっていった。手話通訳者や難聴者の家族、ま

¹⁰ 「市民活動論 持続可能な創造的な社会に向けて」
2005年4月 後藤和子・福原義春編 有斐閣

¹¹ 「中途失聴者と難聴者の世界 見かけは健常者、気付かれない障害者」
2003年8月 山口利勝著 一橋出版

た比較的軽度の難聴者などが、OHPにのせたロールフィルムに会議での発言を書く担当をするようになっていった。しかし、これは単発的な取り組みだった。

1966（昭和41）年5月、東京文京区役所ホールで開かれた「みみより会第2回全国大会」において、ライトスコープによる要約筆記が投影されたというのが、公式な要約筆記の記録としては一番古い。

全国各地では、難聴者の集まる場では、書いたものを回覧したり、黒板を使って書き合ったりして話し合いが行われていた。次第に、難聴者の集団がいくつか生まれ、全国的な集まりを持つにいたったのは、1973（昭和48）年のことだった。11月3日から4日に「第1回難聴者組織推進単位地区研究協議会」が京都市大和屋旅館で開かれ、参集した難聴の仲間はここで、OHPに会議の発言内容が書かれるのを見ることになった。それまでとは違い、格段に自由に発言できる会議を体験した。各地に戻った難聴者は地元の理解者・支援者を得て、学校に設置されていたOHPを使って筆記をしてもらいながら、会議を進めるようになった。このときの、感動をある難聴者は、「集団補聴器」¹²ということばで言い表している。

1975（昭和50）年に岩波書店から出版された『音から隔てられて』は、社会に中途失聴・難聴者の存在を初めて知らせた書といえる。ここには実名で難聴であることを告白し、その苦悩と困難を書き記した15人の手記がある。聴覚障害が世間で抵抗感をもって受け止められていることや社会の偏見による家族への負担など、時代による社会環境の違いを感じる記述が多く

¹² 「中途失聴・難聴者はいろいろな要望を持っている。難聴者に仕事を保障してほしい、そのための職業補導をしてほしい。（中略）集団補聴器 OHP の普及をはかり、それに欠くことのできない要約筆記者を育成してほしい。」1975年岩波新書『音から隔てられて』P135 「Ⅱ 中途失聴・難聴者と現代社会」（林瓢介）から抜粋。

ある。一方で、この本が世に出る結果にもなった、難聴者の集まりの準備などから、仲間の存在や周囲の協力者とのかわりが無上の喜びとなったことが書かれている。

この会議での筆記のサポートを「要約筆記」と呼んだ。しかし、当時は「筆記通訳」という名称でいわれることもあり、1980（昭和55）年ころまで名称に関する論争は続いていた。1981（昭和56）年に厚生省の事業として制度化される際に「要約筆記」という名称が採用され、「全国要約筆記関係者懇談会」が1983年に現在の「全国要約筆記問題研究会（通称；全要研）」に改組されたあとも話題にのぼることはあったが、現在では、「要約筆記」は文字による通訳の名称としてほぼ定着している。

要約筆記は、その技術の中核にあった「要約」という言葉を巡って、様々な捉えられ方をしてきたということが出来る。もちろん要約筆記観（要約筆記に対する見方）と要約を含む技術論に対する見方とは、異なるものであるが、歴史的に見ると、両者は密接不可分の関係にある。

聞こえない人にとって、特に「聞こえる」ということを知っている中途失聴・難聴者にとって、ありのままを知りたい、聞こえていた時のように知りたい、という気持ちは報いがたいものがある。（中略）要約筆記が人と人との関わりの中で取り組む活動である以上、要約筆記者が「要約」について考えるとき、要約筆記の利用者の考え方から自由になるのは極めて困難だった。その意味で、聴覚障害者、とりわけ中途失聴・難聴者の要約筆記に対する期待、要望、望みといった光を受けて、要約筆記の影が作られたということが出来る。

「要約筆記観と技術論の変遷」 下出隆史 「要

約筆記養成指導者用資料集」¹³から

活動の歴史の古い団体のなかには、「東京筆記通訳サークル」（1982年設立）や大阪の「筆記通訳グループぎんなん」（同年設立）など、「筆記通訳」という名称の残る団体名もある。現在でも、時折、「要約筆記」の名称に対して、「文字通訳」「筆記通訳」などの名称変更の議論が出されたりするのも名称論争の名残といえる。

2-2 私的な支援から公的な支援に

よき隣人の気づきから要約筆記はスタートし、全国各地には要約筆記サークルができたり、全国手話通訳問題研究会の各県支部に要約筆記班が作られるなどにより、難聴者の会議にはOHPによる要約筆記が次第に整うようになった。難聴者団体もこれまでは運動的な取り組みは持たなかったが、要約筆記により自分たちの議論やコミュニケーションの場、精神的な憩いの場も成り立つのだという実感から、厚生省に対し、要約筆記を行うものの養成や派遣を要望するに至った。こうした意味では、要約筆記というコミュニケーションの仲介により難聴者が集団化した事実は大きい。そして、このことは、「ろう者とは異なるニーズを持つ聴覚障害者の存在」を社会に向けて訴えることにもなった。この中心にあったのは、1973（昭和48）年に京都に集まった「第1回難聴者組織推進単位地区研究協議会」から進展した「全国難聴者連絡協議会」で、1978（昭和53）年に結成された。ここでOHPによる要約筆記が大きく普及した。今日の全難聴の前身となる組織である。

1981（昭和56）年の厚生省（当時）では「障害者の明るい暮らし促進事業」（都道府県）「身体障害者社会参加促進事業」（市町村）という名

称で補助事業として、「要約筆記奉仕員」として養成・派遣事業が実施することになった。この時期の奉仕員養成事業ではカリキュラムも示されていなかった。ただ、難聴者運動の高まりしだいで、要約筆記奉仕員養成講座が開かれるようになっていく。これは、ろう者とは異なるコミュニケーション支援を必要とする聴覚障害者の存在を社会に認めさせたという難聴者の認識を生んだ。これは、中途失聴や難聴という障害特性を認めさせることであるとして、その後の難聴者運動への強い後押しになったと考えられる。

要約筆記奉仕員養成講座の開始当初は、10項目程度のカリキュラムしかなく、時間数も定められてはいなかったため、各地での講座は地元の状況に任されるしかなかった。

1998（平成10）年、厚生労働省に要約筆記奉仕員養成カリキュラムの策定委員会が設置され、全難聴・全要研をはじめ関係団体が検討にあたった。残念ながら、正味半年という短い検討期間¹⁴であり、特に技術等の理論が整理しきれていたとはいえないが、先駆的に要約筆記が始まった地域でのテキストや技術の検討の蓄積が生かされることになった。1999年、検討結果である「要約筆記奉仕員養成カリキュラム」が、当時の約3300の都道府県、市町村に障害福祉部長発という形で通達された。このカリキュラムでは、基礎課程32時間、応用課程20時間のあわせて52時間の時間数と到達目標、学習内容が示された。時間や内容の適否は別としても、明確な形で時間数が示されたことは大きな成果だった。基礎課程・応用課程の52時間を修了することが奉仕員登録の条件とされたが、実施要綱は

¹³ 平成17年度独立行政法人福祉医療機構助成事業報告書「要約筆記養成指導者用 資料集」

平成18年4月（社）全日本中途失聴者・難聴者団体連合会要約筆記通訳者養成に関する調査研究事業 事業委員会

¹⁴ この前年から全日本ろうあ連盟と全国手話通訳問題研究会が中心となって、手話通訳者養成カリキュラムの検討が行われ、手話奉仕員養成カリキュラム、手話通訳者養成カリキュラム、特別研修カリキュラムという3つのカリキュラムが示されていた。これに関連して急遽要約筆記奉仕員のカリキュラムも検討することが決まった。